

審査の結果の要旨

氏名 吉田(宮坂)菜穂子

本研究は、神経性食欲不振症の患者において、再摂食前後の安静時代謝量および心拍数の変化を観察し、その変化にどのような内因性の因子が関連しているかを検討したもので、下記の結果を得ている。

1. 再摂食前後のエネルギー摂取量の増加に伴い、除脂肪体重に変化はみられなかったものの、安静時代謝量は有意に増加した($p=0.000$)。日中の体動に変化はなかったものの、日中の心拍数も有意に増加した($p=0.028$)。内分泌因子については、IGF-1、トリヨードサイロニン、一日尿中ノルエピネフリンが有意に増加した。自律神経活動については、日中の副交感神経活動が有意に減少し、日中の交感神経活動は増加傾向にあった。

2. 安静時代謝量の変化量と相関のある因子は認められなかったものの、IGF-1、トリヨードサイロニン、一日尿中ノルエピネフリン、心拍数の増加に伴って安静時代謝量が増加し、副交感神経活動の減少に伴って安静時代謝量が増加するという傾向が示された。

3. RR間隔の変化量と日中の相対的交感神経活動の変化量が負の相関を示し($r=-0.783$ 、 $p=0.013$)、また、安静時代謝量、IGF-1、トリヨードサイロニン、一日尿中ノルエピネフリン、交感神経活動の増加に伴って、心拍数が増加し、副交感神経活動の減少に伴って心拍数が増加するという傾向が得られた。

以上、再摂食前後で一日尿中カテコラミンの測定や自律神経活動の測定を行なったのは本研究が初めてであり、安静時代謝量の増加および心拍数の増加に関わる多くの因子を同時に測定したことも本研究の特徴と言える。よって、将来、body mass indexの前値や摂取エネルギーの増加量をコントロールした多変量解析を用いて、refeedingによる安静時代謝量の増加および心拍数の増加に関与する因子の検討するにあたり、本研究は重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。